

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第35回/防空壕

Residence of Prince Asaka 1933—

1933年(昭和8)に旧朝香宮家の邸宅として完成された東京都庭園美術館の敷地内には、75年あまり経った現在でも、当時の生活の一端を物語る遺構がひっそりと残されています。今回はその中から、防空壕を採り上げてみたいと思います。防空壕とは、戦時中空襲による被害を避けるため、地面を掘って作られた緊急避難用の構築物のことです。本土への空襲が始まった太平洋戦争の末期には、都市部にも大小多くの避難施設が築されましたが、ここ朝香宮邸の敷地内にもご家族や職員的安全を確保するため、ある時期(詳細は不明)に計3箇所の防空壕



図1

が築されました。3つの壕は今日でもその姿をよく留めていますが、これがそうだと説明を受けなければ、気が付く方はほとんどいらっしゃらないことでしょう。さて、それではそれぞれの防空壕は一体どこにあるのでしょうか?

まず最初にご紹介するのは、当時宮邸に勤務していた宮内省の職員や女官さんの避難所として設営された防空壕です(図1)。宮邸正面に向かって右手前、車庫を覆うようにして生えている巨大なシイの木の根元に、半ば埋もれたコンクリート製の入口が見え隠れしています。安全のため、すでに壕そのものは埋め戻されていますが、本来は地中に築かれた主室に向かって階段を降りていく構造になっていたのだらうと思われま

す。次は美術館裏手の管理棟前庭に設けられた、宮家ご家族用の防空壕です(図2)。上面がコンクリートで覆われたこの壕は、一見するとただの壇状盛土にしか見えません。当時を知る宮家関係者のご記憶では、この壕の設営にあたり、ご自

身の雛飾りに使用されていた立派な木製の置き台も材料として提供されたとのことですが、^{やすひこおう}鳩彦王が「こんなに浅くは爆撃を避けることはできない」と判断され、実際にはほとんど使用され

ることはなかったそうです。このエピソードを伺った折の、「私の雛飾りは防空壕に化けちゃったんです」と、昔を思い出しながら静かに語ってくださったお姿がたいへん印象的でした。こちらも現在は埋め戻され、内部の様子を知ることはできません。

先の壕が性能的に不十分であるとの理由から、改めて十分な強度を有するコンクリート製の本格的な防空壕が新設されました。茶室のすぐ近くに築かれたこの壕は、周囲の景観に配慮したためか、より自然な築山状の外観をしています(図3)。美術館では数年前、調査のために職員が通気口として設けられた深さ3mほどもある



図3

堅坑から、壕の内部に入ってみました。その結果、内部は土砂が堆積することもなく極めて良好な状態で保存され、厚さが20cmほどもある堅牢なコンクリート壁は、昨日打ち上げたようにたいへんフレッシュな状態であることが確認されました。本来の入口(現在は封鎖)である階段室と、小さな前室を伴う主室から構成されているこの防空壕は、5.62m×2.2mの平面(主室)に、高さ2.1mの天井を有する、とても大規模なものです(図4)。

これらの防空壕の内部公開予定はありませんが、宮邸の歴史を後世に伝えるためにも、我々の手で大切に保存していきたいと思っております。(牟田)



図2

図1.職員用防空壕の全景。中央右寄りのコンクリート製枠組が入口跡。残存する盛土の形状から、壕は入口から右手方向に向かって築かれていたと考えられます。

図2.茶室裏手より見た管理棟前庭のご家族用防空壕。

図3.西洋庭園と日本庭園の境界付近に築山状に成形された新防空壕(写真中央)。壕そのものは半地下式で、上半分を覆うために古墳のような盛土が施されています。背景は美術館本館。

図4.主室奥の通気口より見た室内。正面の扉が本来の出入口です。平成17年3月に行われた内部の調査時点では、すでに室内には何も残されていませんでした。調査後、安全確保のために開口部を塞いだため、現在は内部に立ち入ることはできません。



図4